

「河井道の生涯と信仰—平和思想を中心に」

豊川 慎

1. はじめに

河井道(1877-1953)は当時のキリスト教界を代表する女性指導者であり、戦争反対を唱える平和論者であった。限られた紙数ゆえ、最初に河井の略伝を記した後、河井の平和に関する若干の言葉のみを紹介することにしたい。

2. 河井道とは誰か

河井道は1877(明治10)年に、伊勢神宮の神職の家に生まれた。河井家は由緒ある裕福な家系で、長年神道の職を受け継いできた。しかし、明治政治の緊縮財政方針により、神官の数が減らされ、父が失職。それにより、河井家は北海道に移住する決断をする。河井道、10歳の時のことであった。スミス女学校に在学中にサラ・C・スミスと新渡戸稲造の授業を通じて、多大なる感化を受けた。新渡戸と津田梅子の勧めにより、米国のプリンマー女子大学に留学。卒業後は津田梅子の女子英学塾で教え、その後35歳の時にはYWCA初代日本人総幹事に就任。そして、1929年(昭和4年)、河井が52歳のとき、世界の平和に貢献する女性を育てるため恵泉女学園を創設。1953年2月11日、召天。

3. 河井道における戦争と平和—第一次大戦から日中戦争まで

1914年8月23日、日本はドイツに宣戦布告し、第一次世界大戦に参加する。河井がYWCAの働きに従事しているときであった。河井は『女子青年会』に「病院と戦争」と題して次のように書いている。「私は、始終人々から「私共基督信徒婦人は戦争の際に如何なる心得を持つべきか」と尋ねられます。私は思ひます。最早勇武を以て誉とする

時代は過ぎ去りました。殺伐殺傷は人事界の恥辱であります。(略)剣は元来臆病者の持つべきもの。真の平和を主張し其主義のために倒るる者こそ本当の勇者であると私共は確信致します。剣を持つものは剣をもつて倒れん、柔和なる者は幸なり其人は地を継ぐ事を得なければなりとはキリストの御詞でございます。どうしても世に勝つものは軍隊でも武器でも御座いません。我等の信仰する基督の精神で御座います。此精神を我々婦人の間に益々勃興せしめ、子女子弟を教育するに当たり此精神を鼓舞して人々個々が武器を捨て敵を愛する様に為すべき義務があると思ひます。国家を護るは固より男子の大責任であり、之に対し我等婦人は多大の敬意と感謝の念を以て居ります。併し一方に於ては真個の平和主義を子孫に鼓舞し以て国の要となさしむる為には婦人こそ国家を護る者と言はなければなりません。」「(病院と戦争)『女子青年会』第十一卷第九号 一九一四年(大正三年)

河井は1925年に長年勤めたYWCA総幹事を辞職する。それは世界の平和に貢献する女性を育てんとして学校を創設するためであった。河井は恵泉女学園の創設の時に、カリキュラムとして、キリスト教、聖書、そして園芸と共に「国際」という授業を構想している。「国際」の授業の意義について次のように述べている。「世界を美しい明るい平和な世界にしたいと望まない人はいないだろう。私たちが、広く世界の動きを知り、自分の国、また他の国を理解することは、やがて、平和をもたらせる道ではないだろうか」。河井は広い国際的視野を持っていた。アメリカの大学で学び、またYWCAの働きのために世界の多くの国々を訪れた国際人であった。自己理解のためには他者理解が必要であり、他者を理解するとは自己を理解することであることを認識していた。他者との交わり、友好関係を真に大切にし、恵泉の教育の中

で生徒たちにそのことを身を持って示した教育者であった。河井は「友情の力」こそが「国際的な諸問題の最善の解決策」であると確信していたのである。

1934年(昭和9)、河井57歳の時、アメリカ・キリスト教連合婦人会、外国伝道中央委員会の招きを受け、アメリカに講演旅行のため氷川丸で渡米。半年ほど滞在し、60の都市で200回以上の講演を行った。河井のアメリカ講演の内容の一端を下記に引用しよう。

「理解の欠乏と無関心さと、そしてたぶん嫉妬心やどん欲さえもが、戦争の種となるのです。皮膚の色や、習慣や、伝統や、制度の相違を乗り越えて、各々の国民の心の底まで見通す理解力と精神的洞察を、わたしたちが養うことができないのは、どういうわけでしょうか。(略)どこの国でもいつの時代でも、平和と善意を熱心に希う人々がいるのです。そして彼らの大きなねがいが、その国や世界への私心のない奉仕の源となるのです。平和のためのさまざまな活動は、猜疑心や敵意の厳冬に、凍りついたり、折られたりしがちな若木のようなものであります。(略)たとえ空が煙幕で曇るようなことがあっても、あなた方西洋の婦人も、わたしたち東洋の婦人も、煙幕は人工的で一時的であるが、そのかなたにある平和と愛の太陽は神のわざであって、永遠であることを覚えていなければなりません。わたしたちはお互いにあえて信じ合って、この希望と祈りの実現のために努力しなければなりません」(『私のランタン』316-318頁)

1935年(昭和10)1月、河井はアメリカより帰国する。その後、1937年には日本基督教会連盟の代表の一人として、中国基督教連盟の集いに派遣され、上海、南京に滞在。この年の7月7日、盧溝橋事件が起こり、日中戦争に突入。この時の河井の思いをかつての恵泉の生徒は次のように証言している。

「昭和十二年七月七日、日中戦争が始まりました。河井道子先生は新聞を持って教室に入ってこられるなり、「私は戦争反対です。軍人たちは日本

の方向を誤らせています」と、言われました。私たちが小学校の歴史の時間に習ってきた祖国の像、国語や修身などで教えこまれ、たたきこまれた考え方と、まるで違うのでびっくりしてしまいました。国際感覚を持ち、大きく世界を見ることのできる河井先生なればこそその言葉には、説得力もあり、とても新鮮でした。「こわい世の中になった」と心配し、陰でぶつぶついう人たちは大勢いましたが、堂々という人などいませんでしたから、凜とした威厳で言われた河井道子先生の勇氣に私は心打たれました」(岩崎(安元)京子「河井道子先生の勇氣」『証言集 河井道子 人・信仰・教育』、83頁)

4. 太平洋戦争勃発前後の河井道

日本とアメリカの関係悪化に伴い、1941年(昭和16)4月5日、日本基督教連盟は遣米使節団を派遣することになる。阿部義宗、賀川豊彦、小崎道雄、齋藤惣一、アキスリング、松山常次郎、湯浅八郎他全9名の代表団のうち、河井は唯一の女性であった。

河井は7月20日、アメリカからの船で横浜に上陸。帰国後は、京都の教会で報告会を行い、報告会後、憲兵の取り調べを受けている。

同年の12月8日、日米開戦。河井は『恵泉』誌の巻頭言に次のように記した。「戦時に主の聖降誕を祝うことすでに五回となった。今回は太平洋にての戦争が勃発したのが十二月であるゆえか、平和の君の生まれ給いし期節が今月でなければよいと思える」(「薔薇とクリスマス」『恵泉』第100号1941.12)。この『恵泉』誌は、平和をたたえ軍閥非難を書いた反戦文書と見なされ、回収命令が出された。さらに河井自身、憲兵隊、警察から出頭を命じられた。以後、河井は特高の監視下に置かれ、『恵泉』の発行も停止される。そのような中でも河井は恵泉女学園において毎日の礼拝を守りとおし、生徒たちに平和の大切さを説き続けたのであった。

5. 戦後の河井道

河井は1947年の教育基本法制定に大きな役割を果たしている。河井は戦争による苦難を経験したがゆえに、日本の戦前の軍国主義教育の誤りをよ

く理解していた。戦時中に学徒動員令により徴用された恵泉の教え子の中には、過労労働のために若くして命を失った生徒もいた。河井は深い悲しみの思いを次のような言葉で吐露している。「多くの若い命を戦時下の工場に送ってあたら散らしてしまった戦争の年月をなお生きのびている私たちは、悔いの思いに打ちひしがれて生きつづけなければならないのです。あなたは無益な戦争のために自分の生命を犠牲にした、多くの若い人々の一人なのです」(『スライディング・ドア』91-92頁)

そのような河井は戦後に新たになされるべき教育の大切さを深く理解していた。戦後の新たな教育理念として、「平和」、「正義」、「協力」、「自他の敬愛」、そして「人格の向上」などが重要であることを毅然と発言したのも平和教育そしてその基礎となるべき人格教育の重要性を教育者として十分に痛感していたからに他ならない。

1948年6月号の『恵泉』巻頭言では次のように述べている。

「日本が再び世界を攪乱するとき戦争を心から忌み嫌い、いかにせば平和な国家をたて、世界の平和に貢献すべきかをよく学び、戦争に用いた情熱と献身的犠牲を、平和の建設に捧ぐるほどの真剣さが必要である。この真剣さが今どこにあるかしら。他人のことは顧みずして利己中心、権利主張、争闘生活が全階級に貫通している現在である。(略) 神と人との間に平和のない限り人と人との平和はあり得ない。したがって国と国との平和もない。(略) 良心に責められることなきようにする道は神との平和で、そこから人と人、すなわち家庭から国際までに平和が波紋的に広がるから、お互いに毎日の責任はいかに小さくともこれを完うして、平和建設の基礎工事としたいものである」(『恵泉の春』『恵泉』第139号、1948.6)

6. おわりに

河井は「戦争は女性が世界情勢に関心を持つまでは決して止まないだろう」と言っているが、それは、われわれが他者の置かれている苦しみや困難な状況に無関心でいる限り、平和は実現しないということを意味していよう。他者と共に苦しみ、他者に共感する、そういった感受性を育むことが、

平和を考える上で重要であることを河井は豊かに示している。今後の河井道研究の課題としては、河井の天皇観、キリスト教と天皇制の問題、アジア植民地主義の問題などが挙げられよう。

戦後70年の今年、われわれもまた「平和建設の基礎工事」のために何を為し得るか、河井の平和論を読みながら強くそのことを思わされるのである。



女性宣教医 Dr. アダリーン D. H. ケルシー

安部純子

はじめに

1989年アメリカで収集したWUMSの歴史資料を調べていく中で、横浜で唯一人の女性宣教医であったケルシーのことを知った。医師としての働きも大きかったが、更に想像だにできなかった物語が存在していた。この事実が判明するのは2009年4回目の渡米の折、“Mary P. Pruyn, a missionary to Japan”と題して話をする機会を与えられたことによる。その会に出席していた旧知の歴史家オルトン氏が、ケルシーはMt. ホリヨークの教師であったとご教示くださった。これを手掛かりに帰国後同校に照会するとケルシー自筆の履歴書が送られてきた。また滞在中訪ねたウィルトン歴史資料館でナリター家に関する資料も収集した。これ等によりケルシーに関する全てが明らかになったものである。

Adaline DeMontal Higbee Kelsey は 1844 年 ニューヨーク州ウエストカムデンで農場を営する父アサ・ケルシーと母アマダ・ヒグビーの6人の子供の5番目として誕生。1868年マウント・ホリヨーク・セミナリーを卒業。アイオワで2年間教師を勤めた後N.Y.の女子医科大学に学び75年M.D.を取得して卒業。1年間大学付属病院の研修医として働いた後母校Mt. ホリヨークの校医となり生理学も教えた。

1878年8月、長老派教会より派遣されて宣教医として中国へ赴く。その途上横浜で上海行きの船を待つ間の3日間ヘボン宅で歓待される。上海から山東省へ向かう船旅ではモンスーンに遭遇し沈没の恐怖にさらされるが、無事到着したチェフー

で、ネビアスの自宅に招かれる。ネビアスは伝道旅行中で不在であったが夫人から手厚いもてなしを受ける。

長老派教会華北の宣教地タンチョーを拠点として医療・伝道活動を行う。50マイル四方で唯一人の医師であったため、患者は100マイルも離れた所から診療を受けに来るという状況で多忙を極めた。奥地への医療伝道旅行にも出かけ、中国人医師の指導にもあたった。健康を害し1882年9月帰国。

N.Y.クリフトンスプリングスで静養する間電気治療学を習得する。

1885年WUMSから横浜へ派遣される。診療所を開設することを願っていたが、ボードに資金が無いため、共立女学校の校医として勤務する傍ら患者の家を往診するという方法をとった。外科、内科、眼耳鼻科を一人で担当し薬の処方もし、癌の手術にも成功した。1890年の報告には往診の数1,013件、伝道用パンフレット配布3,000枚という数字が記されている。また1887年には『女学雑誌』に「健全及び躰育」と題する論説を寄せ、女医として日本の若い女性に健康的な衛生知識を説いている。

1890年WUMSは日本での医療活動を中止しケルシーを本国へ召喚する決定をした。当時中国宣教地で新規に病院を建設中であり、多額の資金を必要としていたためである。ケルシー本人は履歴書に過労により健康を害したためと記しているがそれも事実であろう。

帰国の折ケルシーは二人の若い日本女性を連れて帰る。須藤かく、阿部はなの二人で共に共立女学校の卒業生である。

須藤かくは1861年1月父序(ついで)母うりのもと弘前大浦で生まれた。共立女学校を卒業したのは1882年の卒業制度施行前で、在学中に横浜海岸教会でJames H. Ballaghより受洗した。阿部はなは東京府出身、定右衛門の長女として生まれた。卒業は1886年、在学中にBallaghより受洗した。

ケルシーは二人の若い優秀な助手が手伝ってくれたと記しているが、この二人のことであろう。将来有望なこの二人にアメリカで医学教育をうけさせ、母国でクリスチャン医師として活躍することを期待していたものであろう。

帰国後の5年間、ケルシーは実家のあるWカムデンに住み、二人が医学校へ入学するための準備教育にあたった。また学校の費用と帰国に備えての資金集めに奔走した。二人はシンシナティのローラメモリアル医科大学に入学し1896年無事卒業する。

ケルシーは年老いた父と病身の姉の最期を看取ると、1897年須藤かくと阿部はなを伴い再び日本へ出発する。今回はどの外国伝道会へも所属せず自己資金で活動を行うこととした。

横浜到着直後、横浜婦人慈善病院から責任者として招かれる。二人の日本人が日本政府の医師免許取得までの間、外国人居留地でサニタリウムを開く。免許取得は日本の内務省の偏見と事務手続の遅さで困難であった。駐日アメリカ大使は宣教師に理解があり便宜を図ってくれた。先ずワシントンに連絡し、國務長官から日本の内務大臣に宛て「二人の日本女性是一流の医科大学で勉強して十分な資格がある」と電報を打ってもらった。それでもなお時間を要したが免許はおりた。『100年のあゆみ—女医誕生—日本女医会前史』によると二人の医籍登録は1898年で外国医学校出身と付け加えられている。二人は免許取得のため一人20ドル支払い、直ちに横浜婦人慈善病院の医師として働く。

「神奈川県統計書」を見ても、1900、1901、1902年には横浜婦人慈善病院の医師は2名で、1901年横浜市に外国医学校卒業2の数字が記されている。

山鹿旗之進(メソジスト教会牧師)著『封永生』に三人が登場する。永生が入院した時「院長のケルシー女史をはじめ、これが助手たる須藤かく子、阿部はな子の両女史等は永生に対して常ならぬ親切を尽くした」。周辺の状況から推測すると、ケルシーの2回目の横浜での活動はバンペテン(聖經女学校校長)をはじめとするメソジスト教会との関連が多くあったものと考えられる。

1900年夏期にはミッションサニタリウムを開き、中国の義和団事件を逃れてきた宣教師の病氣や怪我の治療にあたった。

1902年ケルシーは帰国する。須藤かく、阿部はなの二人も日本に留まらずアメリカへ帰る道を選ぶ。この度の帰国には須藤かくの実姉ナリタまゆ

の家族7人も加わっていた。以下にこの家族の渡米後について簡潔に述べていく。

ナリタよそきち 夫 ケルシーの実家の農場で働く。
まゆ 妻 トラコーマのため入国できず送還される。
まや 長女 ペンシルベニアのモラビアンセミナリーに学ぶ。フィラデルフィアの病院で看護師として働く。

こういち 長男 ケルシー農場で働く。後にミズーリ州に移る。結婚して息子二人。長男は陸軍442部隊に入隊。じん 次女 アイオワのカレッジに学ぶ。結婚し息子二人。共に442部隊に入隊し長男は戦死。後にSt.Cloudに住み父よそきち、叔母かくの世話をする。

れん 3女 ペンシルベニアでケルシーの姉一家と暮らす。長老派教会の宣教師となりサンフランシスコの日本人長老教会で日本人移民に英語を教える。小笠原氏と結婚。

すえ 4女 13歳の時結核に罹り、ケルシーの勧めでMt. グレゴールのケルシーの妹 クラーク夫妻のもとで暮らす。夫人より教育を受ける。夫人の死後グラント コテージ(この地で静養したグラント大統領の記念館)の管理人を誠実に40年間続け知事から表彰される。1953年の移民法の下で最初の米国市民権を得た日本人。1953年結婚。1984年死去。

須藤かくは姉の家族と共にW. カムデンに住み教会にも通い地域の住民との交流もあった。ケルシーがフロリダに移ると同時に自分も移り住み、1953年アメリカの市民権を取得する。1963年102歳で死去。

阿部はなは電気治療法を習得しアロパティストとして働き1911年(43歳位)で死去。

二人は日本の医師免許を取得したが日本に残らなかった。理由はその折経験した日本人社会の外国医学校卒業という異質なものに対する偏見と、ケルシーとの離れ難い絆の強さであったと思う。二人はケルシーは勿論のことその家族の手厚い保護と支援のもと、より広い大地で生涯を送った。

ナリター家も同様の温かい支援を受けてアメリカで暮らした。移民排斥、戦争という厳しい現実にも直面したであろうが、それぞれに家庭を築き幸せに過ごしたと云えるであろう。

ケルシーは故郷W. デール(W. カムデン)に住み長老派教会に所属し日曜学校教師も務めている。

1923年フロリダのSt. クラウドに移り1931年この地で死去。87歳。遺体は故郷に運ばれ埋葬された。地方紙は「宣教師として献身の生涯—ウエストデールの傑出した女性A.D. ケルシー博士死去」と報じた。

結 び

ケルシーは何故これほどまでに他の人のために尽くしたのか。それは母校Mt. ホリヨークの教育によるものが大きい。1937年創立されたこのセミナリーは全寮制で、教師学生全員が同じ屋根の下で寝食を共にし一つの家庭を形成していた。キリスト教主義を基盤として全人格教育を重視していたのである。ここで培われた教育は使命感を強く抱く女性を育み、教師、宣教師として外国へ出て行く卒業生を多く輩出した。

ケルシーは正しく母校で培った教育を真摯に実践した女性であった。ケルシーは卒業生に宛てた手紙(W. カムデン1903. 10. 23)の中で「願わくはここに学んだ女性がキリストに倣って人生を歩み、他の人びとを幸福にすることができますように。神の祝福が与えられますように。」と書いている。

ケルシーにとって須藤かく、阿部はな、ナリター一家、皆自分の家族であり、幸福にしたいと願った人びとであったものであろう。



聖書和訳の研究—共同訳聖書を中心に

岡 部 一 興

1. 『和英語林集成』と聖書和訳

ヘボンは1859年10月に来日してから1892年10月に帰国するまで33年間、横浜に在住し宣教員として働いた。ヘボンの正式名はジェームス・カーティス・ヘップバーン (James Curtis Hepburn) である。わが国では今日までヘボンの愛称で親しまれている。ヘボンの著作『和英語林集成』には「平文」と自ら書いている。恐らく当時の日本人の耳にヘボンと聴こえたものと思われる。

ヘボンは来日して以来、聖書と訳が最終的な目

的であると考えていた。ヘボン書簡によると、「聖書を日本語に翻訳するということが、わたしどもの最重要な事業であると、わたしどもすべての者が感じております」と述べている。聖書と訳をするには、まず日本語の習得と共に標準的な日本語を獲得し、それを聖書と訳に生かしていくという考え方があった。その基礎作業として『和英語林集成』の編纂が不可欠なものとして浮かび上がってきたものと思われる。

『和英語林集成』1867年の初版の序文において、この辞書を作成するにあたり参照したのは、メドハーストが1830年にバタビヤで出版した『英和和英語彙』、1603年にイエズス会宣教師が出版した『日葡辞書』であった。しかし、その大部分はヘボンが出会った人々から得た生きた言葉を丹念に集めて編纂したものであった。1861年春からヘボンは来日早々施療を始めた。毎日訪れる患者と会話をし、膨大な数の言葉を集め、その意味を把握し、日本の本を読みこみ、英語に置き換え辞書を編纂していった。

2. 漢訳聖書からの翻訳

ヘボンは来日の際、ミッションに預けていた『約翰福音之傳』を取り戻して持参、日本語の勉強に集中し、1861年春頃からマルコ伝の翻訳に取り掛かった。その最初の翻訳は漢訳聖書からの転訳であった。ヘボンは中国伝道の経験を持ち中国語ができたので、日本語に翻訳する時に日本人と共同して翻訳に使える言語は漢文(中国語)であったので、中国語からの翻訳に都合がよかった。勿論ギリシャ語の新約聖書を参照したもの、李樹廷がマルコ伝を漢訳聖書からハンゲルに訳したように、まずは日本語の教師にも読める中国語の聖書からの翻訳が現実的であった。中国語からの聖書は、ブリッジマン・カルバートソン訳の『新約聖書』だったと思われる。そして、1862年の書簡では、ヘボンは「マルコ伝、ヨハネ伝、創世記及び出エジプト記の一部を訳出した」と述べ、S.R. ブラウンもほとんど同じ箇所を翻訳、その意味で彼らは個人訳ではなく、共同訳の聖書を志向しているのが分かる。

漢訳聖書は、日本語の聖書が出版されるまで数多く輸入されていた。ヘボンも漢訳聖書や中国語

訳のキリスト教のイロハを教える書物の普及に努めた。聖書が大衆に広く読まれるためには、分かりやすい文章で書かれた聖書が必要であった。その意味では漢訳聖書は、一部の武士や知識階級しか読めなかったので、平易な標準語による日本語訳聖書の出版が望まれていた。しかも1873年2月まで禁教下であったので、秘密裏に出版を進めるしかなかった。さらに翻訳の作業において第一に困難な問題は、日本語が定まっていなかったことである。武士の言葉、町人の言葉、男、女の言葉など、また文体も漢字にするか、仮名にするか、文語体にするか、口語体にするかという問題があった。第二に聖書の出でくる専門用語をどう訳すかという問題があった。

3. 共同訳聖書

1841年、ヘボンは東洋伝道に出掛けシンガポールでギュツラフ訳『約翰福音之伝』(ヨハネ伝)を入手した。ギュツラフは英国商務庁通訳官としてマカオに滞在中、遠州灘で遭難した小野浦の漁民、岩吉、久吉、音吉に日本語を学びながら『約翰福音之伝』を編纂、これは最初の和訳聖書であった。1846年、ヘボンは5年間の中国伝道を終えて失意のうちにアメリカに帰国した。それから13年間ニューヨークで医業に従事、医者として名声を得た。しかし、その地位を捨てて日本伝道に赴いた。1859年来日したヘボンは、61年春頃からマルコ伝の翻訳に取り掛かった。その翻訳は漢訳聖書からの転訳であった。その漢訳聖書は、上海美華書館刊『新約聖書』であった。漢訳聖書は、日本語聖書が出版されるまで数多く輸入され、普及していったが、一部の知識層に限られていた。ヘボンはかつて中国伝道で出会い、来日していたS.R. ブラウンと共に平易な標準語による日本語訳聖書の必要性を感じていた。

1872年3月10日、日本人による最初のプロテスタント教会である日本基督公会が横浜でJ.H. バラを仮牧師として創立された。そして同年9月、S.R. ブラウン等が日本に在住する宣教師に声をかけ、横浜居留地39番のヘボン邸において宣教師会議が開かれた。バプテテスト派はゴープルが帰米して参加できず、米国監督派(米国聖公会)のウィリアムズとモリスも出席せず、メソジスト派は来

日していなかった。集まった教派は、米国長老派、米国オランダ改革派、会衆派と言われる組合派などであった。この会議で3つのことが決まった。①聖書翻訳の共同委員制、②教派によらざる神学校の開設、③無教派主義による教会形成、他に讃美歌についても協議された。聖書翻訳の面では、共同訳聖書が決まり教派を越えての和訳聖書に取り組むことが決定されたのである。

4. 分冊出版された新約聖書

共同訳による聖書翻訳が実際にスタートしたのは、1874年3月からであった。委員長はS.R. ブラウンが指名され、委員にはヘボン、D.C. グリーン、聖公会からC.M. ウィリアムズ、G.E. エンサー、アメリカ・メソジスト監督教会からR.S. マクレイ、アメリカ・バプテスト教会からN. ブラウンが指名された。しかし、ウィリアムズとE. エンサーは、事情があって参加せず、代わって聖公会からパイパー、ライトが参加した。翻訳委員社中が動き始めて間もなく、パイパー、ライトも、さらにマクレイも委員を辞任した。またN. ブラウンは、バプテスト派独自の聖書翻訳を進めることから一年半後に辞任した。結局、ヘボン、S.R. ブラウン、D.C. グリーンの3人が訳業に従事することになった。それに補助的援助者として、奥野昌綱、松山高吉、高橋五郎が与えられた。翻訳事業の会議はS.R. ブラウン邸に集まり、翻訳作業を行った。新約聖書全体の翻訳が終わったのは、1879(明治12)年11月3日のことであった。1879年に帰米していたS.R. ブラウンのもとに訳業が完成したとの電報がもたらされた。翌年の4月19日東京新栄橋教会で、完成祝賀会が行われた。

一方、独自の翻訳を進めていたN. ブラウン訳の新約聖書は、共同訳聖書より3カ月早く1879年8月のことであった。この聖書は仮名表記による平易な文字で記述され、全国民が共通に平等に使用できることを目的としていた。その点では、ジェームズ欽定訳を標準とするヘボンたちの訳とは違って、N. ブラウンの翻訳は原典主義に基づき、平仮名主義を主張するものであった。その聖書は『志無也久世無志與』(しんやくぜんしょ)と言う表題で、バプテスト派が所有する印刷所で作成された活版印刷の聖書であった。それに対し、

共同訳聖書は和綴じ本で、当時日本で一般的に行われていた版本による木版刷りであった。共同訳聖書は、翻訳に従って分冊発行された。1876年の『路加伝』(ルカ伝)から分冊発行されて、1880年4月『約翰黙示録』(よはねもくしろく)が最後に発行されて、17分冊の新約聖書の出版となった。

5. 旧約聖書とヘボン

1876年10月、東京に在留する各派の宣教師が築地に集まり、聖書翻訳について協議し、東京翻訳委員として13人が選ばれた。しかし、この委員会はその費用を大英国外国聖書会社、スコットランド聖書会社が負担するもので、教派的に偏ったところもあったので、東京翻訳委員会は解散された。その後アメリカン・ボード・ミッションの提案により、1878年5月に新たに宣教師会議が開かれた。旧約聖書の翻訳については、一般の宣教師の協力によって遂行されるべきこととし、各ミッション1名ずつ選ばれて、常置委員会が発足した。そのメンバーはN. ブラウン、J.H. クインビー、G. カクラン、J.C. ヘボン、S.R. ブラウン、W.B. ライト、H. ワデル、J. ゴーブル、F. クレッカー、R.S. マクレイ、D.C. グリーン、J. パイパーの12人であった。

旧約聖書も翻訳され出すと、随時分冊出版の形を取っていった。洋仮綴じの形を取って、1882年に「約拿哈基馬拉基合本」(ヨナ、ハガイ、マラキ)が出版されて以来、1887年に「雅歌耶利米垂哀歌」(ガカ、エレミア、アイカ)が出版されるまで、28分冊に分けて随時発行された。1888(明治21)年2月3日東京築地の新栄橋教会にて完成祝賀会が行われた。新約聖書の翻訳委員が挙げられてここまで実に15年の歳月が経過し、新約と旧約聖書の両方に携わったのはヘボンただ一人であった。それらの翻訳の作業において、聖書翻訳をトータルにみた場合、ヘボンがどのくらい聖書を翻訳したかをみると、驚くべきことが明らかになった。新約聖書27巻と旧約聖書39巻合わせて66巻のうち、新約聖書の6割以上、旧約聖書の5割近くがヘボンによって訳された。

以上の分析を通して、ヘボンが関わった聖書翻訳は、日本における和訳聖書史においてどのように位置づけたらよいか。日本人の補助者たちが言

語に十分な知識を備えていない時代にどのようにして理想とする共同訳聖書が編纂されたのかを発表した。そのようななかで、聖書翻訳についてギリシャ語原典やヘブル語原典からの翻訳がどうなされたかという点において、一部の研究者に誤解がある点を最後に述べて結論にしたい。

ヘボン、S.R. ブラウン等の共同訳聖書やN. ブラウンの『志無也久世無志與』の翻訳は、「英訳からの重訳」だったという批判がある。しかし、それは間違いであることが明らかにされた。彼等宣教師たちは、神学校に入る前にギリシャ語を習得していたのである。またN. ブラウンの新約聖書の翻訳にあつては、4世紀のギリシャ語写本まで使って翻訳、また共同訳聖書についてもギリシャ語の原典である「Textus Receptus (テキストゥス・レセプトゥス1516年エラスムスが作成)を使用し、また旧約聖書についてもヘブル語から翻訳がなされていたことが明らかにされた。

D.C.グリーン「新約聖書翻訳委員会公式記録」と1875年版「新約聖書路加傳」

鈴木 進

1872年秋、「新約聖書馬可傳」と「新約聖書約翰傳」、そして73年春に「新約聖書馬太傳」が出版された。これらには、禁教下あるいは黙許時代の同種の出版物の常として訳者名が記されていないが、ヘボンの「日本ミッションの起源」と題する講演、あるいは『奥野昌綱先生略伝』等からも、ヘボン・ブラウン訳であると断定してよからう。それでは、ルカ伝はどうしたのか、4福音書のうちルカ伝だけが出版されないのは奇異に思われる。

「馬太傳」が出た2年後、1875年になって「新約聖書路加傳」が出版された。これもまた訳者名がない。同書が先の3福音書に続くヘボン・ブラウン訳というならば、福音書が全部揃ったことになるが、果たしてそのように言い切つてよいものか。

この疑問に答えてくれる資料がD.C. グリーン「新約聖書翻訳委員会公式記録」、正式には英文“Record of the Committee for the translation of the Bible into the Japanese Language”で、委員会書記であったグリーンが翻訳作業の過程を詳細

に記録した一冊のノートである。コロンビア大学図書館に保存されていたものを、1957年に寄贈を受け、現在は聖書図書館に所蔵されている。これをZ. イェール師が翻字して、解説も加え、日本聖書研究会『聖書研究』No.23 (Dec. 1985)に収録され、日本聖書協会より出版された。この資料を用いて、前述の「新約聖書路加傳」の訳者名をめぐる問題を考えてみよう。

最初に述べたヘボン・ブラウン訳3福音書はいわば個人訳であった。ヘボンはそのずっと以前から、日本における聖書翻訳は共同の事業によってなされるべきという考えを持っていた。(ヘボン書簡、1866年の9月4日、ホルドリッチ博士宛)。このヘボンの願いは1872年9月開催の日本における最初の宣教師会議において協議され、新約聖書翻訳委員会制が決議されたが、委員の選出が難航し、新約聖書委員会(社中)は2年後の1874年春になってはじめて開かれた。

グリーンの記録によれば第1回委員会は1874年3月25日、出席者はJ.C. ヘボン(米長老教会)、S.R. ブラウン(米改革派教会 委員会の議長)、D.C. グリーン(ABCFM 委員会書記)、R.S. Maclay(米メソジスト監督教会)の4人の翻訳委員の他に、委員会の委嘱を受けた補佐役として奥野、松山の2名の日本人名が記されている。バプテスト教会のN.ブラウンは第2回委員会から出席している。翻訳にはTextus Receptusを正本とし、ヘボン原訳をS.R. ブラウンとタムソンが改定したルカ伝の語句修正、訳文改定から作業が始められた。

語句の修正は23箇所^{いふか}に及ぶがそのうちの2、3の例を取り上げてみよう。問題になったのは1章29節、討議によって“the question of insertion or omission of ἰδοῦσα laid over from yesterday... it was decided unanimously to omit the word in translation”。その結果75年版は「^を^{とめ} 處女その言葉を訝りこの間安^{あいごつ}はいかなることかやとおもへり」となった。このことから、修正以前のヘボン訳が「^をとめ彼を見て訝」であったのであろうと推測できる。ヘボンが参考にしたと思われるブリッジマン・カルバートンによる漢訳は「女見之訝」、KJVもAnd when she saw him,であり、これら二つの訳の底本Textus Receptusはἡ δὲ ἰδοῦσα διεταράχθη ἐπὶ τῷ λόγῳ αὐτοῦである。現在広く用

いられている Nestle-Aland 版 や United Bible Societies Greek text には ἰδοῦσα が省かれているが Nestle 初版 (1897年)、Wescott-Hort (1881年) 等の参照は時代的に有り得ない。この時の委員会 はもしかしたら Tischendorf (1849年) を見ての判断であったのか、omission と決した根拠は不明である。

2 章 17 節、the rendering of διεγνώρισαν was changed from “iishirase (kereba)” as agreed upon at the last meeting to “iihirome (kereba)”、と διεγνώρισαν の訳語「いい知らせければ」を「いいひろめければ」に修正することで委員会は合意 (agreed) したとある。ところが 75 版では「つけひろめければ」となっている。委員会の決議した訳がこのように変えられたのは日本人助手によるのではなかろうか。

次に訳文の改訂の記録をみてみよう。2 章 14 節に関して協議した結果下の訳文にすることで委員会として意見の一致 (agreed) をみた。“Ito takaki ni oite wa homare Kami ni. Chi ni oite wa odayaka megumi ningen ni.”。これが 75 年版では「天上ところにハ栄光神にあれ 地にハ平安人にハめぐみあれ」になっている。下線部 (筆者)、とローマ字訳との相違を比べると、後者が日本語としてより自然な表現に直されている。これもまた日本人補佐役による推敲なのか。

3 章 3 節に関して、the following translation of the 3rd verse of the 3rd chapter, which was laid over from the last session, was adopted. “Zakaria no ko Yoane no ni ite kami no ose wo komuri Yorudan no hotori no subete no chi ni kitari, tsumi no yurushi wo yesashimen ga tame, kui arateme no senrei wo nobe tsutaetari”。バプテスト教会の N. ブラウンはこの βάπτισμα に senrei という漢訳の訳語をそのままあてることに納得せず、委員会に再検討を求めた註(1)。75 年版では「ザカリアの子ヨハネ野に居て神の命令をうけヨルダンのほとりなるすべての地にきたり罪の赦しを得させんがためくいあらめバプテスマを宣つたへたり」となっている。

次に 75 年版「路加傳」の訳語をみてみよう。ヘボンが聖書翻訳に取り組んだ幕末、明治初期の日本社会や日本語に存在しなかった聖書世界の概

念、事物、制度をどのような日本語で表現したのであろうか。訳語についても、訳文と同様に「漢訳聖書によって、非常に助けを受けた」(ヘボン書簡、1861年4月17日)とラウリー博士宛に書いている。ヘボン訳の底本となったブリッジマン・カルバートソン訳からの漢語の借用が多いが、委員、特に日本人の助手はそれらをそのまま用いず、訓読、意訳して日本語本来の和語に近づけようと努めたと思われる。その例として、漢語の「履」に「履」(わらじ)、「福」を「福」(さいはい)、「税吏」→「税吏」(みつきとり)、「復生」→「復生」(よみがへり)、「工師」→「工師」(いへつくり)と、やまとことばのふり仮名をつけている(ふり仮名の読みが本文、漢字はそれの補助)。漢訳が一字であったのを二字に修正した例、「兵」→「兵卒」(つはもの)、「榮」→「榮光」(えいこう)など、これらは二文字の語の方が日本人には受け入れやすいと考えたのであろう。固有名詞はギリシャ語発音に倣ったのか、「髑髏」→「クラニオン」、「路加」→「路加」(るか)など。但し「聖霊」→「聖霊」(せいれい)、「福音」→「福音」(ふくいん)、「教法師」→「教法師」(けうぼうし)など、重要な聖書用語は漢語をそのまま音読している。

委員会は日本語聖書の翻訳に漢訳聖書の訳語の多くを借用し、それらを和語に言い換えようと努めていることがわかる。同様に訳文もまた、漢文直訳文を和風の文に直し、日本語として自然な、美しい文章を目指したのであろう。このように日本文を作るうえで、日本人補佐が果たした役割は決して宣教師委員に劣らず大きかったのではないか。彼らのこの作業は①漢訳(中国語)を日本語式に語順を変え、②漢字を訓読みにし、③日本語特有の助詞、助動詞を加え、④敬語を補う、等に見られる。にもかかわらず従来、新約聖書翻訳はヘボン、ブラウン、グリーンなど宣教師翻訳委員の業績とされ、日本人補佐役の働きがあまり評価されることがなかったのではなかろうか。

そのような中であって、次のフルベッキの発言に注目したい。G.フルベッキは “It may safely be said that there is no foreigner in this country who has such a knowledge of the language as to qualify him alone to bring out an idiomatic and good translation without the aid of a native scholar. And the literary merit of a translation will be depended principally upon the ability and

scholarship of the native assistant.”註(2)。といい、ヘボンもまたフルベッキと同様に考え、“The foreigner and the native work together and mutually assist each other.”(THE LETTERS OF DR.J.C. HEPBURN p.213)と述べ、日本語聖書は翻訳委員会における宣教師翻訳委員と日本人補佐者の相互の協力の成果と評価している。

1875年版「新約聖書路加傳」の①出版年月日1875(明治8)年7月23日以前のことであろう。(ヘボンは講演の中では8月と言っているが、ラウリー博士宛1875年7月23日付け手紙では「ルカ伝はやっと出版されました」と報告している)。
②本の体裁は木版刷和装本、百丁。それ以前の3福音書の半分の大きさ③筆跡も3福音書(奥野昌綱が版下を書いたと言われる)と異なる④訳者名は無く、米国聖書会社蔵印の円形朱印が押してある。

これまで述べてきたように、ヘボンは翻訳委員会発足以前にルカ伝翻訳を終えていた。それをさらにS.R.ブラウンとタムソンが改訂したものを出版するつもりであった。しかし共同訳の委員会の一員となった時点で、もはや個人訳としてではなく、委員会の手これを委ねた。委員会はこの原稿を一語一語、一文一文検討、さらに改訳を加えた。グリーンの記録によればルカ伝改訂だけで80回に及ぶ委員会が開かれ、約9ヶ月、300時間を使ったと記されている。もはやこれらはヘボン、ブラウン訳ルカ伝とは言えまい。翌76年に正式に翻訳社中訳と明記した「新約聖書路加傳」が出たという事実からいっても、1875年版「新約聖書路加傳」は翻訳委員会試訳版と呼ぶのが妥当ではなからうか。

註(1)これを受け委員会はβάπτισμα問題に関する回覧状を起草し、75年1月11日日本在住プロテスタント教会宣教師に配布。アンケートの結果「バプテスマ」を訳語とする者が多数をしめた。N.ブラウンは75年版の「バプテスマ」をも不満とし、1876年委員を辞任した。彼は独自の聖書和訳を進め、1879年(委員会訳新約聖書出版1年前)に『志無也久世無志与』を刊行。同聖書ではβάπτισμαを(しづめ)と訳している。

(2)Japan Gazette, April 24, 1880. (『植村正久と其の時代』第4巻、p108)

【研究発表リスト(その38)】

- 第362回 2014. 11. 15 松岡 正治
「ヘボン博士に導かれた二人の男
—中川嘉兵平と中川愛咲く」
- 第363回 2014. 12. 20 尾崎 るみ
「若松賤子を支えた女性たち
—日本婦人矯風会との関わりを中心に—」
- 第364回 2015. 1. 17
鈴木南美子・原島 正・吉馴明子・岡部一興
『『植民地化・デモクラシー・再臨運動』をめぐって—デモクラシーを中心に—』
- 第365回 2015. 2. 21 豊川 慎
「河井道の生涯と信仰
—平和思想を中心に—」
- 第366回 2015. 3. 21 鈴木 進
『『D.C.グリーン「新約聖書翻訳委員会公式記録」と1875年版「新約聖書 路加傳」』
- 第367回 2015. 4. 18 安部 純子
「Dr. アダリン・D.H. ケルシー」
- 第368回 2015. 5. 16 岡部 一興
「聖書和訳の研究—共同訳聖書を中心に—」
- 第369回 2015. 6. 20 中島 昭子
「テストヴィド神父と神山復生病院」
- 第370回 2015. 7. 18 岸野 久
『『ザビエル学』はいま
—新しいザビエル象の探求—』
- 第371回 2015. 8. 22 津田 憲一
「沖縄戦集団自決の現場を訪ねて」
- 第372回 2015. 9. 12
「戦前～戦中～戦後の日本基督教会
—国民儀礼—」
- 第373回 2015. 10. 17 権田 益美
「運上所内英学所」

《横浜プロテスタント史研究会のHP》

【ホーム・ページ】<http://yokoproken.com/>
中井幸夫氏が毎月更新しています。ご覧下さい。

【横浜プロテスタント史研究会の役員】

安部純子・遠藤 香・岡部一興・中島耕二・
中井幸夫・花島光男 顧問 小林功芳
会計 遠藤 香 事務局 岡部一興

オーバン神学校を調査

勝手ながら紙面が1頁、空いてしまいましたので岡部が昨年アメリカで調査をしたことについて書かせて頂きました。実は2014年6月9日～21日にかけてNYのユニオン神学校とオーバン神学校があった所に妻と行ってきました。オワスコ・アウトレットのリフォームド教会の牧師を通してヒストリアンのローレルさんと会い、運よくこの方が調査に同行してくれまして大変助かりました。

明治学院大学の教科の中に「明治学院研究」という講座がありまして、一昨年S.R. ブラウンとフルベッキを担当しました。そういうこともあって調査旅行に行きました。

かつてオーバン神学校には、フルベッキが学んでいました。1856年に入学、59年に卒業しています。その学生時代にS.R. ブラウンが牧するサンド・ビーチ教会でブラウンの助手的なことをやっています、ブラウンの推薦で、1859年に同じ船で来航し、ブラウンは神奈川へ、フルベッキは長崎に上陸しました。ブラウンは来日前の1851年から59年の8年間サンド・ビーチ教会に仕え、スプリングサイドという学校を立ち上げました。その先生をやっていたのが、フェリスのキダーさんでありました。現在スプリングサイドという当時の学校は、スプリングサイド・インというホテルとして生まれ変わっています。このことがはじめからわかっていたら、このホテルに泊まりたかったです。

サンドビーチ教会には、フルベッキ、キダー、そしてフルベッキの奥さんになるマニヨンがいました。またブラウン、フルベッキと一緒に日本に来た自給女性宣教師アドリアンスもこの教会の会員でした。ということで、サンドビーチ教会は日本のキリスト教と大変関係深いことが分かりました。サンドビーチ教会の建物は残っていますが、礼拝はここではしていません。この比較的近いところに姉妹教会のリフォームド教会がありましてそこの礼拝に参加しました。サンドビーチ教会の建物をスプリングサイド・インの社長が買取りまして、そこにも資料がありました。

オーバン神学校は、1810年に創立、1939年に立ち行かなくなり、神学校はなくなりました。しかし、その後わかったことですが、卒業生は出して

いませんが、講演会や教職者の研修はやっているようです。しかし、オーバン神学校の旧キャンパスには、ウイラード・メモリアル・チャペルと、その隣の建物は残っています。その校内には世界的な宝飾品で有名なティファニーによって設計された素晴らしい教会堂が、そのまま残っていて、在りし日の姿を彷彿させるものがあります。現在は結婚式にも使われ、おみやげなども扱い、見学者が結構来るようです。ここでも資料を探索、またユニオン神学校のパーク・ライブラリーにも資料ありましたので、そこも行ってきました。

横浜指路教会の教職者を見ると、オーバン神学校の出身者が何と6人もいます。H. ルーミス、G.W. ノックス、山本秀煌、毛利官治、菅生三雄、村田四郎がオーバン神学校の出身です。1885年の卒業が田村直臣で、これが一番早く横浜指路教会で毛利牧師の後、若くして亡くなった菅生三雄牧師は、1939年の卒業でした。田村から菅生牧師まで73名がオーバン神学校を卒業していました。そのうち何と明治学院神学部の出身が40名に上ります。そこで、明治学院大学キリスト教研究所の『紀要』47号(2015年1月)に「オーバン神学校に学んだ人々」という題で、資料紹介的な論文を書きました。(岡部一興)

【編集後記】

横浜プロテスタント史研究会報57号を届けします。従来、発表の報告について400字詰原稿用紙で5枚程度でお願いしてきましたが、変更して10枚程度にしました。これによりまして、いくらか内容的に充実したのではないかと思います。

1981年10月からスタートしたこの研究会は、100名を超える方々に案内を出しています。多くの方々の支えによって、何とか研究会が継続されています。どうぞこれからも研究会を支えて下さるとともに、発表して下さる方は申し出て頂きますと大変助かります。例会の継続にあたっては、運営委員の方々と相談しながら進めています。できれば3ヵ月前、6ヵ月前に発表者に御願いますように心がけています。レポートして下さる方も、早く決まれば、準備の点で余裕が出てくると思われますので、出来るだけ早めをお願いしています。

(岡部一興記)